

大谷教師塾 教員養成ナビゲータ

大谷大学
教職支援センター

第105号

2014.2.24

『一意専心』 ～一つのこと集中すること～

副センター長 市川郁子

第104号の「大谷教師塾」では、「どんな教師をめざしますか」という内容のお話が掲載されていました。そろそろ2013年度の終盤です。

あなたは、その問いに明確に答えられるよう考えがまとまっているのでしょうか？あるいは、めざす教師像に向かって既に取り組みを始めているのでしょうか？

表題の「一意専心」は、一つのこと集中することを意味します。ソチオリンピックに向けての日本選手団の目標です。そして、これは、北京オリンピックでの水泳200メートル平泳ぎで、アテネオリンピックに続き金メダルに輝いた北島選手の目標でもあったのです。ソチオリンピックにおいても、多くの選手が「記録が伸びなくてくじけそうになったこと」「もうやめようと思っただけのこと」「けがに泣いたこと」等、多くの困難を乗り越えて自分の力を精一杯出し切れたことに喜びを感じる、つらい時期があったからこそ今の自分がある、といった感想を述べている場面が何度となく放映されています。苦しいこと、辛いこと、苦手なことを乗り越え、一つの目標に向かって心を集中し、努力を続けた結果として、自分自身の成長を喜べるのだと思います。また、仲間が協力し合って、支え合ってチームの夢を実現できたことを喜び合えるのでしょうか。

みなさんは、「ゼヒトモ、教師になる」という自分の目標に向けて、力を付けられているのでしょうか。目標を実現していくためには、時間を有効に使って、計画的にも

のごとを進めなければなりません。

ところが、時間というものは何もしなくても、止まることなく流れ続けています。また、私たちに与えられている一日（24時間）はみんな同じです。与えられた限られた時間をいかに使って行くのか。しっかり考えることなくぼんやりと無駄に過ごすのか、何かに一生懸命打ち込んで過ごすのか、それは一人一人に任されています。与えられた時間に何を詰め込んで行くのか、中身を決めているのは自分自身です。

自分の目標を実現していくためには、何を、いつまでに、どんな方法で、どこまでやるのかをしっかりと考え、自分らしくこつこつと努力していくことが大切です。

最初は、少しがんばればできそうだといいところに目標をおき、それが実現できれば、少し高いところに目標を次々に置き換えていくことです。今年度、力を伸ばせたことに目を向け、自分自身の頑張りを適切に自己評価すれば、さらなる目標が決められるはず。ぜひとも実現したい「とっておきの目標」を決めてください。

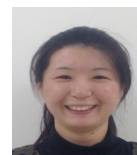
困難やしんどいことから逃げず、弱腰になったり、負けそうになったりしそうな自分の心と戦いながら、「一意専心」、目標に向かって心を集中し、努力を続けてほしいと思います。教職をめざす仲間とも力を合わせてください。教職支援センターは、みなさんの頑張る力がさらに向上するよう、努力が実を結ぶよう、支援を続けます。



市川郁子副センター長

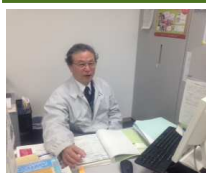
目次

1. 「一意専心」に取り組もう！
市川郁子 副センター長
2. 「教職をめざす」みなさんに
吉川 栄一 アドバイザー
3. 『尋源館を描く』
～京都市立紫明小学校の
子どもたちとともに～
井川 利尾 先生
4. 先生と子どもの成長の喜び
～教育実習から帰って～
小寺 祥世
5. 「卒論発表会(望月ゼミ)」の
「ポスターセッション」



「教職をめざす」みなさんに

教職支援センター アドバイザー 吉川 栄一



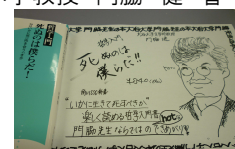
早や2月になりました。今、あなたは、本気で「教師になろう」と考えていますか？本気にならないと教員採用選考試験(教採)は乗り切れません。

「本気」は、次のやるべきことを着実に実行し積み上げることです。右の取組内容はどれだけ進みましたか？「なんとかなるかなあ」と思っているならそれは甘い考えです。今日から、「やるべきことを着実に実行」しなければ、あなたの夢は遠のいていきます。

君の夢を、実現するために…

- 教採まで、あと5カ月だと、明確に意識している
 - 受験地の教育の内容やキーワードを知っている
 - 受験府県の過去問題を2度3度と繰り返している
 - 小論文の添削を受けている
 - 模擬授業や模擬面接に取り組んでいる、など。
- また、教職支援アドバイザー・コーナーに頻繁に顔を出し真摯に確実に取り組んでください。待っています。

6. 読書案内
哲学入門「死ぬのは僕らだ」
本学教授 門脇 健 著



教育・心理学科 福澤 万理

7. これからの予定
面接セミナーや志願書記入

井川利尾先生からのアドバイス 図画工作など幼稚園・小学校の先生の「教材研究」

教職支援センター地域連携企画「おおたにキッズキャンパス 大学で写生大会!」「赤レンガ 100周年 絵画展」

京都市立紫明小学校の児童と共に「子どもたちと日々成長する先生を目指して」



表彰式の子どもたち：前列左 森田富美子校長先生
 後列左から岩瀬信明センター長、草野顕之本学学長

今回の「おおたにキッズキャンパス」は、近隣の紫明小学校との連携により、本学のシンボルである尋源館の写生を通じて子どもたちに本学への親近感を持ってもらうことも目的の一つとしています。また、子どもたちの作品から優秀作品を選び表彰式を開催するとともに「赤レンガ100周年 絵画展」と題して写生画をギャラリーに展示することで、近隣の方々の来校を促す地域連携交流としての取り組みました。

今回、初等科教育法などで図画工作の授業を担当する井川利尾先生に取組を通じた成果などのお話を伺いました。

まず、井川先生は「本来、子どもたちは絵を描いたり、物を作ったりすることが大好きです」「その表現活動の中で子どもに『感じる心』や深い認識が育っていく」と話されます。本館を熱心に描く児童の姿からも図画工作の可能性を再認識されたそうです。

では、「そんな児童に向き合う幼稚園や小学校の教員の図画工作の指導の構えは？」と尋ねると、

目の前の子どものよさや可能性を開花させるために、教員が強く指導上イメージすることは、「対象や材料などの特徴を生かして、形や色で子どもの思いを表現したり、自分が発想したものを作り上げたり、鑑賞を通じて造形的なものの見方・考え方などを深めたりする総合的な力を育む視点をもつことだ」と、力説されます。

図画工作の分野で『生きる力』を培い、『豊かな人間性』を育むには、「形や色、ものの質感などに関わって、自分（子ども）を取り巻く世界を再発見し、新たな意味をもたせながら再構築する力を育てるのです。」

図画工作という教科の大きな意義は、「造形活動を通して、子ども自身が様々な学習経験や生活体験を、主体的に関連付けながら自分のものにしていく過程にあります。」児童にとって、絵を描くという、「学習体験」のもつ今日的な意味も改めて先生は強調されます。

「現代社会は生活が便利になり、子どもの身の回りに物が溢れ、なんでも簡単に欲しいものが手に入るようになりました。加えて、コンピュータやゲームなどで仮想世界に入り、思いのまま楽しむこともできます。

しかし、このような時代だからこそ、素朴な材料や目の前の対象物に挑み、自分の思いを色と形で表現したり鑑賞したりすることにより、考える楽しさ・工夫する楽しさ・できる楽しさ・友達と一緒に学ぶ楽しさ・困難を乗り越える楽しさなどいろいろな「楽しさ」を学べる

図画工作の魅力が学生たちにたくさん伝えていきたい。」と力強く抱負を語る井川先生。

井川先生は本年度4月からの着任。学生たちからも慕われ「大学の仕事が楽しくて仕方がない!」との笑顔の表情は素晴らしい。「本学の赤レンガの校舎の歴史を調べて、児童と共に作品として描くことで私も本学に深い愛着が生まれました。」と。案外、この言葉こそ、図画工作・美術教育を支える大きな影の「力」ではないかと取材しつつ感じた次第です。

(西寺 記)



学長賞の児童の作品



井川利尾先生



(上) 井川先生と熱心な児童たち

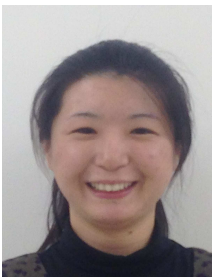
紫明小学校長森田富美子先生の話
 「児童は、レトロな校舎に感動し、鐘楼塔やレンガの色の濃淡などに思いのほか集中して取り組んでくれました。学校近くの素晴らしい環境でのとても良い連携講座でした。」

先生と子どもの成長に喜びを感じて

～教育実習の経験を活かす～

文学研究科修士課程 第2学年

こてら さちよ
小寺 祥世



私は今年度、6月中旬から3週間、母校、福井県の灯明寺中学校で教育実習で学びました。その感動体験を報告します。

喜びと不安

実際の教育現場を経験できるという喜びの他に、実習生としてやり通すことができるのかとの不安も最初、大きくありました。

私の母校は、当時は荒れた学校で先生の厳しい指導の中で学校生活をおくった記憶があり母校に帰ることが怖くもありました。

不安は吹き飛ばす

しかし、母校に赴き、はじめに感じたことは行き届いた清掃と礼儀正しい挨拶の声でした。

今の母校では『灯中三黙』という活動が行われており、これは黙って3つのこと（朝読書、清掃、黙想）を行うことです。

この時間になると学校中が静まり、生徒一人一人、そして教師も一丸となって一言も話さず活動に取り組んでいます。

三黙の効果

私は、このような厳しい決まりの中で生徒たちは窮屈なのではないかと考えましたが、実際の生徒たちは反発も少なく、節度を保ちながら楽しく、明るく、伸び伸びと学校生活を送っていました。

それは、心を鎮める時間をつくること、生徒同士だけでなく教師も一丸となって協力することが、自然と道徳を学ぶことに繋がり、教育の向上になったのだと校長先生に教えていただきました。

英語で学び、英語で教える

また、教科である英語では、教師の説明を聞き、発音や文法読解をするものであるというイメージに対し、生徒主体での英語を使ったアクティビティを多く取り入れた授業構成であることに驚きを感じました。

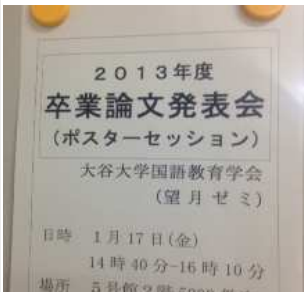
さらに授業はオールイングリッシュで行われ、ALTやデジタル教材を使ったネイティブの発音に慣れさせるといった授業がなされ生徒もその指導にくらいついて学習していました。

見極めて、成長を！

私は、戸惑いを感じながらも、今の教育に求められていることを見極め、教師も生徒のためになるよう学習、成長しなければならないのだと学びました。

私は、地元での教育実習の経験を活かし、これからも常に向上心を持ち続け、多くのことを学び続け、成長していきたいと思えます。

「卒論発表会」のポスターセッション初めて開催



教育・心理学科の望月 謙二ゼミでは、本年度ポスターセッション（P S）形式での「卒業論文発表会」に取り組んだ。

卒論の発表者もP S形式ならではの各自の工夫が見られ参加者も関心のあるテーマの発表者との質疑などで一層理解が深められ有意義だった。

望月先生は「卒論は4年間の小学校教職課程の学びの集大成だ。新たにP S形式での発表機会で、学生の教壇での課題や実践力がさらに明確になった」と。教育・心理学科の関口敏美先生も今後、学生の多様な発表形式の工夫や広がり期待されていた。



学生（高橋由衣・陣内千奈）の発表を熱心に聞く教育・心理学科の関口敏美・望月謙二両先生



ポスターセッション形式での発表の様子

教育実習での様子



研究授業では、3の場面の授業を行いました。これは、2の場面を振り返っている様子です。



3の場面に出てくるたくさんのおもしろい生き物がどのようなか、イメージする授業を行いました。児童からは、こんなにたくさん意見が出て、黒板がいっぱいになりました！



（資料提供：高橋由衣さん）

当日、ポスターセッションに取り組んだ学生は 高橋由衣・陣内千奈・高橋茉由・神馬佑季・古屋萌子・永井理美・佐々木貴昭の7人でした。

参観者は教職員も含めて15名でした。

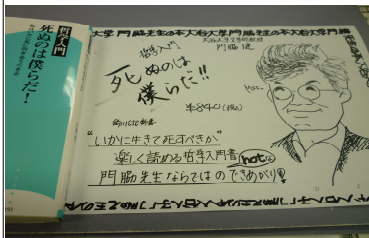
（2014年1月17日）

哲学入門 「死ぬのは僕らだ！」

かどわき けん
門脇 健 著

読書案内

教育・心理学科 第3学年 福澤 万理（ふくざわ まり）



みなさんは大谷大学の門脇先生をご存知ですか？

大学構内のどこかで見たり、名前を耳にしたり、授業を受けたりしたことがある方も多いと思う。

ここに紹介するのはそんな門脇先生の本です。

新書版の宣伝帯に内田樹氏が「門脇先生は哲学をポップスや映画と同じレベルで語る。どんなものであれ、自分の身体を「震わせた」経験には等しく正面から対峙するこの潔さに私は深い敬意を寄せる」と推薦文を寄せている。

私はそんな推薦文に誘われニーチェの「すべての人々のための、そして誰のためでもない一冊の書物」を取り入れた話を読み、「贈りもの」について考えて（哲学して）みた。

今、こうして生きている中で、どれ程相手を考えて行動ができているのだろうか？何より、私たちは百年後には存在も知られない程の生き方しかできないかもしれない。

この本を通じて「贈りもの」を通じたつながりの大切さを感じた。この「贈りもの」が指すものは、言葉であったり行動であったり…（即物的な）「物」とは限らず、さまざまな形がある。この「贈りもの」をすることで尊敬する人、大切な人、助けたい人など誰かの心に残っていく。私にとって、それを今後感じられる場の一つが「教育現場」だと考えた。これから接するであろう「子ども」にたくさんの「贈りもの」を渡し、つながっていく。そしてまた育ててくださった方々に「贈りもの」を渡していきたいと本書を読みつつ感じ（哲学し）たのである。「いかに生きて死ぬべきか」という問いは、誰かに「贈りもの」をするためにも、私たちがどのように「生きるのか」を考えるきっかけを本書を通じて与えられた気がする。

この本を読みながら今まで思いもよらぬ考え—「私は哲学している…」という、幸福感を味わっている。

ぜひ皆さんも、本書を通じて「哲学」してみませんか？

（写真は大垣書店の内藤さん作の【本書紹介ポップ】と角川SSC新書表紙の一部の合成）

今年の直木賞と芥川賞

直木賞は姫野カオルコさんは滋賀県の忍者で名高い甲賀の生まれ。彼女の小説の多くは滋賀県が舞台という。

今作「昭和の犬」は5度目の候補から「その気高さを保ったまま、よくこの高みまで押し上げた（浅田次郎の選評）」と言われる作品。

滋賀県出身の学生は是非、興味を持って読んでほしい。学生時代の豊かな読書経験が教師準備の骨格を作ると思います。

芥川賞受賞の記事から

小山田浩子さんの記事（京都新聞1月23日朝刊）は面白い。

「私はパソコンを開いて『ディスクス忌』と打ち込んだ。他は何も考えていない。しかし、タイトルを打ち込んだ途端、そこに1文目が出現した、1文目は2文目を連れてきた…云々…」

文は作家の「指先から生まれた」という。話題作や映画の原作となった山本兼一著『利休にたずねよ』や百田尚樹著『永遠の0（ゼロ）』など訓練された作家の指先から生まれた作品にも挑戦してください。

諸君の小論文や論作文もこのように書けたらいいね。（西寺 正 記）

これから開催されるセミナーや教師塾の講座などの予定

次年度教員採用選考試験受験予定者対象

教職アドバイザー（馬場信行・吉川栄一・西寺 正）による

「面接セミナー・志願書記入説明会」のご案内

《面接セミナー》

- 2月 3日（月） 13：00～14：00 入門及び実践編 2クラス
- 3月 5日（水） 12：30～14：30 実践編 3クラス
- 3月26日（水） 12：30～14：30 実践編 3クラス

対象学年：3年（1・2・大学院生も参加可能） スーツ着用のこと

《志願書記入説明会》

- 3月4日（火） 14：30～16：10 主に京都市の希望者対象に
- 3月5日（水） 12：30～14：30 主に京都府の希望者対象に
- 3月7日（金） 12：30～14：30 滋賀・大阪などの府県・市の対象者に

対象学年：3年・大学院1年

▲ 京都教師塾（第8期） いずれも京都市総合教育センターにて 受付9：30～

* 第5回 教育実践特別公開講座 平成26年2月22日（10：00～12：00）

講義『学校における言語活動の充実に向けて』島本 由紀 統括首席

* 第6回 教育実践特別公開講座 平成26年3月8日（10：00～12：00）

講義『学校における教育相談的関わりについて

～カウンセリングマインドによる児童・生徒理解～』

平田 満 教育相談総合センター カウンセラー

毎回、講義の終了後には「京都教師塾」スタッフとの懇談もあるとのこと。これ以外に教師養成講座は、今、京都府や滋賀県、奈良県、大阪府市また府下の教育委員会（高槻市など）が主催される教師塾もあります。ふるって参加を！



「面接セミナー」での真剣な様子